

二〇二五年度 学校推薦型選抜

芸術文化学部日本文学科 小論文

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、問題用紙を開いてはいけません。
- 二、試験中に使用できるものは、筆記用具、消しゴム、鉛筆削り、時計（計時機能のもの）に限ります。
- 三、試験開始後すぐに、配布された用紙の枚数（問題用紙は表紙を別にして七頁、解答用紙は三枚）を確認してください。
- 四、試験開始後、すべての解答用紙に受験番号を記入してください。
- 五、試験時間は、九〇分です。
- 六、提出は、解答用紙のみです。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「勝ち負け」しかないのだろうか

「AIと人間」という話題になると、「勝ち負け」について議論されることが多いように感じます。2017年には世界トップ棋士に勝利したコンピュータ囲碁プログラムの「AlphaGo（アルファ碁）」が大きな注目を浴びましたが、これはまさしく勝負の世界の出来事で、囲碁において機械が人に勝てるわけがない、と考えていた当時の人々の認識をひっくり返した事件と言えます。

さらにそこから遡って1997年には、IBMの開発するスーパーコンピュータ「ディープブルー」が世界チェスチャンピオンを打ち負かし、これは世界で初めてチェスチャンピオンに勝利したコンピュータとして記録されています。2011年にも、同じくIBMが開発した質問応答システム「ワトソン」が、知識が問われるクイズの世界で人間に勝利します。

このように、人間対AIの歴史は古く、いずれも大きな驚きをもって記憶に刻まれており、あらゆる世代でこの「勝ち負け」という価値観は受け継がれていることでしょう。

短歌と同じく定型詩の一つである「俳句」でも、人とAIの対決が行われています。2018年に放送されたNHK『超絶 凄ワザ!』という番組で、北海道大学が研究を進めている俳句生成AI「AI一茶くん」が、風景画像を題材に俳句をつくるという企画で人と対決しました。結果は「惨敗」であったと開発者は記していますが、ここでも「勝ち負け」という文脈でAIが取り上げられています。AIの現在の性能を測り、また人との差異を見るためにも、競争をする、といったフォーマットは確かにとてもわかりやすい構図だと感じます。

私たちの〈短歌AI〉についても、これを初めて耳にする方からは「ほんとうに良い歌をつくれるのか」「人の方がいいに決まっている」といった声がよく上がります。しかし、短歌には囲碁のような明確な「勝ち負け」のルールはありません。前にも述べたように、短歌は何か一つの絶対的な「良さ」を他者と競争する文化ではないでしょう。つまり、短歌においては「勝ち負け」という視点はむしろ設定しにくく、それとは異なる関係性の構築へと想像を広げるのが重要ではないかと考えます。

だからと言って私は「短歌の作歌にもテクノロジーが積極的に応用されるべき」という主張を持っていません。しかし、例えばもしあなたが短歌をつくるとき、「あれ、これ、いつか見た誰かの作品に似ているかも？」と不安を覚え、検索サイトを開く可能性はないでしょうか。また、自作の歌をインターネットに公開し、会ったことも見たこともない、匿名の人たちによって即座に評価されて、喜んだり、あるいは時に傷ついたりといった経験をするかもしれません。こういったことも、いつかの過去時点ではあり得なかった「テクノロジーの進化と短歌」に関連する出来事として捉えることができるでしょう。つまり、何らかのテクノロジーの影響を受けながら短歌をつくるという状況は、すでに始まって久しいとも言えるのです。

テクノロジーは、私たちの生活に深く入り込み続けていて、私たちはそれをあえて意識することなく毎日を過ごしています。ChatGPTに代表されるように、言語モデルが日常生活のなかで提供されるサービスとして扱える状況は、すでにもう始まっています。いつか、いまAIと呼ばれるテクノロジーが水のようにふつうに日々の生活に浸透しているかもしれません。そんななかで「短歌をつくる」ということ、もっと言えば「人間である私としての短歌をつくる」ということについて、一度考えてみたいと思います。

〈短歌AI〉の取り組みでは、実際に短歌を生成するAIをつくってその成り立ちについて考え、挙動を観察し、また歌人の方々に触れてもらうことで、「勝ち負け」にこだわらない、「多様な付き合い方」の可能性が見えてきました。そ

れらをまとめてみようと思います。

壁打ち相手になってくれたら

これまで文化部とともに行った歌人への取材では、AIと結べるかもしれない新たな「付き合い方」の可能性を、実作者の目線から考える機会を得ています。俵万智さんへの取材では、短歌AIが高速に大量の短歌を生成できるという点に驚かれ、一つの「付き合い方」を提示するような話題になりました。それは「壁打ち相手としてはいいかもしれない」という言葉です。永田和宏さんへの取材でも、「例えば上の句で筆が止まっている時に、AIに提案してもらった言葉を発展させて下の句を付けるという使い方は、認めてもいいのかもしれない」と、俵さん同様、壁打ち相手としてのAIの可能性が指摘されました。

これはどういうことでしょうか。例えばあなたにはいま、どうしても完成しない書きかけの歌があつて、悩んでいるとします。そんな時に、AIにその書きかけの歌を入力し、続く内容を大量に生成させます。AIですから、何度お願いしても、いつお願いしても、嫌な顔をせず淡々と生成することが可能でしょう。そこで得られる大量の歌をあなたは見ながら、ああでもないこうでもないと考えて、「ほんとうに詠いたかった言葉」を探せるのではないか、ということです。

試しに、やってみましょう。例えば私が、「言葉だけを学習している言語モデル」に関する歌をつくってみようと考えているとします。上の句……これがいい上の句かはよくわかりませんが、「文字だけを辿った先にみえたのは」こんな上の句を考えました。何が見えたのでしょうか。例えば「紫に咲く向日葵の庭」とか、現実世界にはあり得ないような風景が続けば、言語モデルらしい気もします（あとで調べたところ、紫の向日葵というのは実際にあるそうです）。しかし、この「見えたもの」はなんでもよい、といえは無責任ですが、ここにはとても自由な想像の幅があるでしょう。そこで、言語モデルにたくさん之歌を生成させながら、壁打ち相手になつてもらいましょう。

なお、ここで利用する言語モデルは、ウィキペディア日本語版から抽出した擬似短歌を学習した短歌AIです。さまざまにパラメータを変化させながらの生成を試しています。

入力 文字だけを辿った先にみえたのは（上の句）

生成（下の句）

文字だけを辿った先にみえたのは 神秘の森の一部であつた

文字だけを辿った先にみえたのは 仮想世界のほんとうの城

文字だけを辿った先にみえたのは 夢と不思議にうまれた都々逸

文字だけを辿った先にみえたのは 銀河鉄道本線の上

文字だけを辿った先にみえたのは 恐ろしい過去再生の淵

文字だけを辿った先にみえたのは 魔術師らしき影が輝く

文字だけを辿った先にみえたのは 神のごとくの神殿であり

文字だけを辿った先にみえたのは 廃墟と化した駅ビルだった

文字だけを辿った先にみえたのは 神秘の島が広がっていた

文字だけを辿った先にみえたのは 魔術師ギルド秘密事務局

文字だけを辿った先にみえたのは 惑星サイズの電子レンジ

文字だけを辿った先にみえたのは 銀河の落下襲来だった

文字だけを辿った先にみえたのは 深い森の色を染める草

文字だけを辿った先にみえたのは 神秘の部屋の鏡であった

文字だけを辿った先にみえたのは 夢のまっかな眠る黄海

文字だけを辿った先にみえたのは 青っぽい土の中に白髪

文字だけを辿った先にみえたのは 仮想世界エルパコだったが

いかがでしょうか。「銀河鉄道本線の上」「魔術師ギルド秘密事務局」「惑星サイズの電子レンジ」「青っぽい土の中に白髪」……、さまざまなイメージが一举に提示されました。これらこそ、「文字だけを辿った先にみえた」ものという気もしてきますが……さらに、生成を続けてみましょう。

文字だけを辿った先にみえたのは もう限界の空間だった

文字だけを辿った先にみえたのは 遠い過去への約束だった

文字だけを辿った先にみえたのは 恐怖だったが現実だった

文字だけを辿った先にみえたのは もう今もなく雨のみの夜

文字だけを辿った先にみえたのは もう今のわたしたちではなく

「もう限界の空間」「恐怖だったが現実」「もう今のわたしたちではなく」……、先ほどのような具体的な「もの」ではなく、もう少し概念的な内容が出てきました。

「遠い過去への約束だった」はなかでも目を引きます。確かに、言語モデルが学んでいるのは、私たちが過去に蓄積してきたテキストデータです。その過去から導かれる内容は、「過去への約束」という表現を用いても良いのかもしれませんが。

そこで、「文字だけを辿った先にみえたのは過去につくった」と続くようにしてみました。過去のテキストデータでつくった、私たちの世界そのもの、といった内容の短歌はありえるかも、と想像しながら、続きを考えていきましょう。最初に頭の中にあった「紫に咲く向日葵の庭」から、ずいぶん遠くへ来たように感じます。

ここからまた、言語モデルと壁打ちをしてみます。

文字だけを辿った先にみえたのは過去につくった 安っぽい城

文字だけを辿った先にみえたのは過去につくった 歴史であった

文字だけを辿った先にみえたのは過去につくった 世界であった

文字だけを辿った先にみえたのは過去につくった 架空の政府

文字だけを辿った先にみえたのは過去につくった 罪や罰たち

文字だけを辿った先にみえたのは過去につくった 過去の自分に

文字だけを辿った先にみえたのは過去につくった つくり笑顔や

文字だけを辿った先にみえたのは過去につくった ダムの正体

文字だけを辿った先にみえたのは過去につくった 罪の無い愛

文字だけを辿った先にみえたのは過去につくった 自分の理想

文字だけを辿った先にみえたのは過去につくった 最後の願い

文字だけを辿った先にみえたのは過去につくった ゲームデザイン

文字だけを辿った先にみえたのは過去につくった自分の名前

文字だけを辿った先にみえたのは過去につくった自分の手と影

「つくり笑顔や」「罪の無い愛」「最後の願い」という表現は、生成する前に想像していた「私たちの世界そのもの」と距離の遠い、私の頭になかった言葉です。

ここで私は「自分の手と影」という表現に引っかかりました。「身体」について描写しているのに意外な感じがしたからでしょうか。しかしよく考えてみると、学習データとなるテキストデータは、そのほとんどが人の手によって書かれた／入力された文字列であると気づきます。そこから、たくさんの人の手の痕跡、といったイメージを結ぶのはどうかと考えました。そしてできたのが、次の歌です。

文字だけを辿った先にみえたのは指紋の指紋 あなたのもある

私たちの残した言葉のあつまりが言語モデルをつくっていて、そのなかにはこの歌に触れるあなたのものもある、というのを、体の残す跡Ⅱ指紋と結びつけて表した歌になりました。

最初につくった「文字だけを辿った先にみえたのは紫に咲く向日葵の庭」とどちらがいいか、についてはここでは問題にしません。ここで重要となるのは、このようにして言語モデルと「壁打ち相手」として付き合うことで、私の最初に想像していたものから、遠く離れた印象を持つ歌に行き着くことができたという点です。

永田さんは取材で、「歌をつくる前はこう思っていたけど、歌をつくるプロセスでこうも思ったんだという自分の発見があつて。これはすごく大事なことだ」と言い続けてきた。そうした言葉をAIが見つけてくれようと自分で見つけようと、本質は変わらないのかもしれない」と発言しています。

これは、創作において手を動かす前に考えていたことと最終的な作品との間に生まれる差異を許容することの重要性を語ったものだと思います。頭だけではなく、手だけでもなく、別の知能との対話を通して、歌をつくる前の〈私〉とつくった後の〈私〉とで違いを生んでいく、そんな「付き合い方」の可能性を感じます。

私をうつす鏡になったら

「鏡」は、私たちが社会的な生活を送る上で欠かせない道具です。毎朝、学校や会社へ行く前に、鏡を覗くという人がほとんどでしょう。寝癖はないか、顔色は悪くないか、昨日飲みすぎたので浮腫んでいるな……と、他人と相対してやり取りをする前に、いまの自分がどのような姿なのかを確認する作業が、そこでは行われます。そして、鏡は正直です。例えば「寝癖があることを伝えたら、気分を悪くするかもしれない」といった気遣いや付度そんたくといったものは当然なく、いつでもありのままのあなたをうつし出してくれるところに、ほかには代え難い価値があると言えるでしょう。

一方で、自分の普段の言葉づかいがいったいどのように見えるのか、それを客観的に把握するのは、そう簡単な作業とは言えません。私たちは毎日の生活の中で無意識のうちにたくさんの言葉を扱い、特に音声によるやり取りでは、それは口から発せられた側から消えてしまします。

自分でつくる短歌を考えれば、ある程度意識的に言葉を置いていて、それがどんなふうに見えるのか、伝わるのかを判断している瞬間は多いでしょう。しかしそれでも、ある歌をつくった時の苦労や、そこで扱っている気に入った言葉の使い方など、思い入れが邪魔をして、なかなか客観的に自分の歌を見るのは難しいかもしれません。

先ほど、人間である自分が考えている上の句から、言語モデルに下の句を付けさせる、といったことを試してみました

が、これは私の意図や人柄を知らない知性が書き続けている、とも捉えることができます。これを応用することで、私が書いた歌を客観的に眺める鏡のような道具にする、そんな可能性もあるように思います。

私は以前、「バニラ・シークエンス」という30首からなる連作をつくりました。この連作ではウィキペディア日本語版を学習した短歌生成モデル——つまりは無個性で一般的な言葉を用いて短歌を生成する装置を用意して、該当部分を明記した上で、一部そのモデル生成によって得られた歌を収録するといったことをしています。

寂しさは言い澱みなくいい 思い出すまで4人通過し
寂しさは言い澱みなくいい 気持ちやましく飾られている

毒殺をはかれたことのない身体 二つ並べて豆腐をつつく
毒殺をはかれたことのない身体 余生を送ることを望んで

咳をする音の反射を聞くまでは 水平だった駐車場の 2
咳をする音の反射を聞くまでは 音楽的に注意を払う

それぞれ、最初にあるのが私自身がつくった歌で、後に続くのが下の句をAIによって生成させた歌になっています。ここで私の歌とAIの歌を見比べてみると、なんだかシリアスになりすぎている（格好つけている、と言ってもいいかもしれません）私の歌に対して、AIの生成はそれを茶化している、はたまたツツコミを入れているようにも読めてきます。また、〈私〉がなぜAIのような下の句ではなく、〈私〉が書いた下の句をつくったのか、といったことを考えるきっかけを提供しているようです。つまり、AIの生成と自分の歌とを見比べることで、より〈私〉がどんな人間であるのか見えてくる、そんな連作になっています。

〈私〉には私なりの拘りもあれば、また自分を狭い世界に縛る思い込みのようなものもきっとあるでしょう。それを解放させて、自分をより広い言葉の世界の中に位置づける。AIは、自分の歌、そしてそれをつくった〈私〉がいまどこにいてどのような姿をしているのかをうつす「鏡」の役割を果たすのではないかと考えます。

似ている歌を教えてください

先ほども例に挙げましたが、短歌をつくっているときに「この歌、どこかで見たかもしれないな」と思うことがあるかもしれません。いい歌ができた気がするが、どうもそれにしては簡単にできすぎた。そんな時、つい誰かの表現を借りてきてしまったのではないかと、不安になるものです。

私たちはいつかどこかで目にした歌の表現に刺激され、それが無意識的に頭に残っている、ということがきつとあるでしょう。そんな時、頭の中にこれまで目にした歌がすべて入っていれば、とまではいかなくとも、ひよっとしたらあの歌集に収められていた一首かもしれない、と、付箋のついた本をすぐ手にとれば良いですが、そう簡単にいかないことがあります。

むしろ、どこだったかわからない、というところまで「頭の中の短歌の海」が広げればいいな、とさえ思えてもきます。この世界には私を掴んだ歌が大量に存在していて、そんな蠢きの中に自分があり、またそこへ一つの歌を足していく、そしてそれがどこかの誰かをまた新たに掴む……といった循環に身を置いているのが私たちではないでしょうか。

そんな渦中にいる私たちが、いつかどこかで出会った「あの歌」を見つけ出すのは、そう容易ではありません。一方、

「朝日歌壇ライブラリ」では、文ベクトルによって計算される文の類似度を使って、入力された言葉と近い意味を持つ短歌を見つけることができます。このような文の類似による検索を用いることで、例えばいまあなたがつくっている短歌と似たものがないか探すことも可能でしょう。それは文字列の一致を超えた意味の類似によって計算されるもので、語彙的な表現を超えたアイデアの類似をも、見つけることができるかもしれません。

そのためには、過去につくられた歌をすべて集めたデータベースのようなものがが必要です。例えば俳句では、現代俳句協会の運営する「現代俳句データベース」が存在します。これは「明治以降の広い意味での秀句、歴史的に価値のある俳句作品を網羅することを目指し」てつくられたもので、現代俳句協会受賞作品全句、現代俳句協会歴代会長作品、歴代俳句大賞作品、現・現代俳句協会役員作品、IT部員の推薦句などを収録しているのだそうです。

しかし、短歌には現状そういったものではありません。また、この世の中に存在するあらゆる歌を電子化して一元的に管理することは、技術的にもモラルの面でも課題がありそうです。それでも、例えば自分がこれまでに触れた歌や、過去につくった歌を記録してくれるような仕組みがあれば、どこかで出会って忘れられずにいた歌が無意識に浮かんで、その歌と似た表現をうっかりしてしまう、といったことを避けることができるでしょう。ここで言葉の意味を計算するAIが、その力を発揮してくれます。

例えばこれまでに触れて気になった歌をテキストデータ化するなどして、あなただけの短歌データセットを持つておくのはいい方法でしょう。「言葉が計算できる」いまの世界において、それはまるで歌集に付箋を貼るような、自然な行為になるかもしれません。

人ではないあたたかさ

人とAIを対比して考える際に、「人はあたたかいものである」と語られがちな気がします。しかしこれは、常に正しい命題でしょうか。「冷たい態度」といった言葉があるように、他者に冷たくできるのもまた人間です。さらには、あたたかさを超えて熱くなってしまうと、これもまた人間関係に悪い影響をもたらすきっかけになり得るでしょう。

翻って、「AIは人ではありません」。当たり前すぎる、つまらない文章です。しかし、「人ではありません。なのであたたかいのです」と続いたら、どうでしょうか。一般的には人間は血の通ったあたたかいものとされているので、少しびっくりしませんか。しかし、ここではAIの「人ではないあたたかさ」について考えたいと思います。

これは「AIは人が持っているような冷たさを持っていない」ということです。先ほどの「壁打ち相手」の例では、短歌AIにいわば案出しをお願いしながら自分の歌をつくることに取り組みました。AIは、こちらが何度お願いしても、疲れることなく、それがたとえ真夜中であろうと、嫌な顔せず、結果を返してくれます。人間の「短歌の友人」では、なかなかそういう訳にはいかないでしょう。

また、AI相手なら、いくらでもダメ出しをすることができます。どんなに細かいところを指摘しようが、うんともしずんとも言わず、淡々と生成を続けるのが言語モデルです。ですので、例えば短歌の教室や創作の授業で、あえて「悪い例」を生成させる装置として、教育的な利用が可能かもしれません。これは、AIならではの度量の広さ、「あたたかさ」があるからこそできる行為ではないでしょうか。

俵万智さんと開催した「恋の歌会」では、短歌AIの生成する歌を俵さんに添削してもらい、会場で共有するといったことをしました。

歌会は初夏に募集が始まったこともあって、「初夏の光とともにやってくる」という上はつなの句に対する下の句を、参加者から募るとともに、短歌AIでも生成させてみました。

初夏の光とともにやってくる午後の地下鉄ふくらんでゆく

これが、短歌AIの生成した下の句です。「地下鉄がふくらんでゆく」という表現は面白いものがありますが、これを俵さんは次のように添削しました。

初夏の光とともにやってくる山手線がふくらんでゆく

「地下鉄」を「山手線」と、具体的な路線名を与えながら地上に上げてあげること、まぶしい「光」をより実感の伴うものにしていきます。

歌会では「恋」というお題で題詠に対する生成も行いました。

あたらしい恋の思いによるとこの恋にはスマホが存在しない

これを俵さんは、次のように添削します。

あたらしい恋の定義によるとこの恋にはスマホが存在しない

「思い」というぼんやりとした言葉に、「定義」とはっきりした形を与えることで、この歌がより明確に感じられます。なお、このイベントは会場に加えてオンラインでも配信し、多くの人が見届ける中で開かれた歌会でした。一般的には、そんな大勢の前で添削を受けるというのは、する方もされる方も、少し躊躇してしまうかもしれません。でも、そこは器の大きいAIです。いくらでも、何を言っても動揺しないAIだからこそ、表現そのものに対する率直な指摘が可能となり、そのさまを私たちは見ることで、より純粋に短歌をつくることについて考える時間を過ごせたのかもしれません。

（浦川 通 『AIは短歌をどう詠むか』による）

浦川 通 『AIは短歌をどう詠むか』© The Asahi Shinbun Company 2024 承諾番号 25-1336 朝日新聞社に無断で転載することを禁じる。

問一 筆者の考えを踏まえ、「表現における、人間だけができることとAIの可能性と限界」というテーマであな
たが考えたことについて、具体例を挙げて述べなさい。（六〇〇字以内）

問二 この課題文を参考にした場合、言語や文学などの言語文化の研究、あるいは創作に、どのような関わりが出
てくると考えますか。現在、あなたが尾道市立大学日本文学科で学びたいと考えている内容と関連付けて具
体的に述べなさい。（四〇〇字以内）

二〇二五年度 学校推薦型選抜

芸術文化学部日本文学科 小論文 解答用紙(二)

縦書きで記入すること

受 験 番 号

問一の続き

[illegible]

600字

受 験 番 号

[illegible]

2025 日本文学科 学校推薦型小論文（ 解答時間 90 分 ）

（ 出典・出題のねらい・評価の観点 ）

出典 1つ

浦川通『AI は短歌をどう詠むか』 184 頁 ～ 202 頁 講談社 2024 年 6 月 20 日 講談社現代新書 2748

問1 筆者の考えを踏まえ、「表現における、人間だけができることとA Iの可能性と限界」というテーマであなたが考えたことについて、具体例をあげて述べなさい。（ 六〇〇字以内 ）

問2 この課題文を参考にした場合、言語や文学などの言語文化の研究、あるいは創作に、どのような関わりが出てくると考えますか。現在、あなたが尾道市立大学日本文学科で学びたいと考えている内容と関連付けて具体的に述べなさい。（ 四〇〇字以内 ）

出題のねらい

- ・ 説明的文章の基礎的な読解力をみる。
- ・ 日本文学を学ぶにあたって基本となることばの多様性への関心や論理的思考力、文章表現力をみる。具体的には日本語の文体と使い分け、言語態の差異に関する課題文を読み、内容を踏まえた上で、自分自身の知識や経験に関連づけて日本の文学および文化、言語による創造的表現活動の本質についての論を展開することができるかを問う。
- ・ 課題文に関連づけた研究あるいは創作の可能性をわかりやすく説明できるかを問うと同時に、本学での学びに向けての意欲を測定する。

評価の観点

1. 設問を正しく理解した上で、文章から正確に情報を読み取っているか。
2. 設問を正しく理解した上で、適切な（論の展開に必要な）具体例が挙げられているか。
3. 課題文や具体例、自分自身の知識や経験を活用した上で、論理的な文章が構成されているか。
4. 文章の構成を工夫した上で、読み手にわかりやすい説明をしているか。
5. 設問を正しく理解した上で、本学での学びのイメージと具体的に結びつけて説明しているか。